

## 量子生態学・基礎理論要旨

量子生態学は、あらゆる現象を電子移動だけで把握する学門です。

量子生態学によれば、現象変化の原因は電子移動というたった一つの要素だけであり、恐ろしく現象解明は容易です。

従って提唱者は、物理科学を一切学んだことが無くとも、生命・放射能・気象・農業・AI問題・進化論等々、全てのジャンルについて解説可能です。しかし量子生態学を素直に学ぶなら、恐らく小学生レベルでも、提唱者同様、理論解説が可能になるだろうと想定しています。

その意味でご縁があり、量子生態学に接した皆様は何としても、量子生態学を理解頂きたいと思います。さすれば、真の自然摂理を世界に先駆けて理解でき、自然摂理に沿う生き方を自ら掴むだろうと思います。

自然界は、人類社会に対し、無言の警告を提示し続けています。その提示内容は、量子生態学を理解すると、日々容易に実感できるようになるでしょう。

自然摂理への理解者が増えることを願い、量子生態学を人類社会にご提供します。

本書は、基本現象の要旨です。

詳細は、理論サイト（無料）や関連書籍（有料・但し一部無料）をご覧ください。

理論サイト <https://www.nogami.co.jp/qewj/index.html>

関連書籍は、特定テーマに絞りまとめています。全体を体系的に説明する統合理論書は、未出版です。従って全貌を把握するには、全ての書籍を読み解いて頂く必要があります。

統合理論は、理論サイトで順次公開予定です。

なお、量子生態学には、近代物理科学と違う概念があります。頭を切り替えて接して頂きますよう、お願い申し上げます。

### 1. 原子は、陽子・電子・中性子、で構成される

原子は、陽子・電子・中性子の3つで構成されています。

量子生態学では、この3つを、次のように把握します。

陽子 = + 電気エネルギー

電子 = - 電気エネルギー

中性子 =  $\pm 0$  の磁石力

### 2. 量子生態学で言う量子

量子生態学では、原子を構成する上記3つの要素を「量子」と呼び、量子生態学で言う量子は、この3種類だけです。

近代物理科学による量子のうち、クォークやレプトンなどの素粒子類は存在しないと、量子生

態学では考えています。従って、3種類以外の量子の把握は不要です。

量子生態学で言う量子とは、陽子・電子・中性子、3種類を言う

### 3. 量子は数が変わると、「もの」が変わる

「量子」は、数が変わると「もの」が変わる、即ち違う「もの」に変化します。  
どんな「もの」に変わるかは、その存在環境に左右されます。

簡単に見てみましょう。

まず、「もの」として把握する世界を見てみましょう。

「りんご」や「みかん」が、箱の中に1個ずつ入っていました。  
そこへ誰かが新しく、「りんご」と「みかん」を1個ずつ、追加して入れました。  
でも箱の中は、「りんご」と「みかん」に変わりはなく、ただ数が2個ずつに変化しただけです。

では、自然界を「量子」として把握するとどうなるか、見てみましょう。

箱の中に、「水素原子が1個」入っていました。  
しかしこれは、「もの」の世界です。量子の視点では、「陽子」と「電子」が1個ずつ入っていました、となります。

そこへ、誰かが水素原子を、もう1個入れます。「量子」の視点では、「陽子」と「電子」が、2個ずつになります。

この箱の中を、ある人が見たら、水素原子2個でした。ところが、ある人が見たら、ヘリウム原子1個でした。

この箱に、誰かが、さらに水素原子4個を入れました。  
箱の中は、「陽子」と「電子」が、4個ずつになります。

その箱の中を、ある人が見たら、水素原子6個でした。ところが、ある人が見たら、水素原子4個と、ヘリウム原子1個が見えました。さらにある人が見たら、水素原子1個と、ヘリウム原子1個と、リチウム原子1個が見え、ある人には、炭素原子1個しか見えませんでした。

これが「量子」の世界です。

見え方が違う原因は、「箱の中の環境の違い」です。

環境差は、温度、圧力、中性子の関与、紫外線、水分子、酸素、様々なイオン化分子など、多様な要素で作られます。従って、「量子」の組みあわせに影響する環境条件は、地球圏内には気が遠くなるほど、膨大な要因があります。

しかし、これさえも多くは陽子と電子で整理され、主要要因は、「温度・圧力・中性子の関与」に絞られます。そして量子生態学を追求すれば、いずれ地球自然界の現象の、ほぼあらゆる解析が、スパコンとAIで容易になるでしょう。

## 4. 原子は、「もの」と「量子」と、2つの性質を持つ

通常、原子を構成する量子の、陽子と電子の数は同じです。従って、+と-の電気エネルギー量は+-ゼロで、自然界に存在する「もの」は、電気を帯びていません。

ここから電子が 1 個でも移動すると、途端にその部分は、電荷を持つ「量子エネルギー」に変化します。

原子から電子が 1 個消失する = 原子は+ 1 の電荷を帯びる  
原子に電子 1 個が追加される = 原子は- 1 の電荷を帯びる

つまり、「もの」から電子が 1 個でも動くと、その「もの」は「量子」の存在に変化し、今までの「もの」と違う「もの」に変化します。

電子が動いて電荷数が変わることを、近代物理学ではイオン化として把握します。且つこれを「粒と波」の性質として捉えており、波=量子エネルギーではなく、「物質波」として研究しています。それ故に、全ての現象を理解できずにいます。

量子生態学では原子の性質を「粒と波」ではなく、「もの」と「量子エネルギー」として把握します。即ち原子は、次の 2 つの性質を持っています。

電荷± 0 の「もの」= 粒  
電荷を持つ「量子」= 量子エネルギー

## 5. 「もの」が成立する仕組み

自然界は、どんな「もの」どんな「存在」も、原子の集合として成立しています。

この繋がりは、原子が同じ電子を共有することで、実現されています。量子生態学による電子を共有するシステムは、次の 3 つです。

(電子の) 部分共有結合=隣り合う原子と原子が同じ電子を共有して繋がる  
(電子の) 全体共有結合=原子集合体の場全体で、集合体内の電子を共有する  
(電子の) 授受結合=原子間で電子を受け渡し+と-に荷電し、磁石になり繋がる

近代物理学では、部分共有結合を共有結合、全体共有結合を金属結合、授受結合をイオン結合と呼びます。いずれも、物質概念による呼称です。

## 6. 「もの」が壊れる仕組み

電子の共有で成立している「もの」から、電子が 1 個でも動くと、その部分の原子の共有は失われ、「もの」は壊れます。

例えば人体は、部分共有結合で成立しています。人体特定箇所から電子が動くと、この部分の原子の繋がりが失われ、傷口という開口部が生まれます。

少し話がそれますが、傷が出来た直後の部位は-の電子を失うため陽子が過剰になり、+に帯電します。今まで電荷ゼロの人体部位が途端に+の電荷を帯びるので電気を感じ、これがピリピリとした痛みにあたります。従ってこの状態は、感電と同じと考えても良いでしょう。

病気は、人体臓器でも骨でも、病気発生部位に異常な電子移動が起こり発生しています。ホルモンなどの代謝異常も、全て同じ仕組みです。

有機物以外も同じです。鉄などの金属の多くは、全体共有結合で成立しています。金属塊の場合、中全体を電子が移動し、全ての原子が全ての移動する電子を共有しています。電子移動が場の全体に及び、電気は電子と共に流れ、金属は通電が良くなっています。

また金属塊は外側表面から酸化され、故に外側から電子を失いやすくなっています。鉄が外側から錆びるのは、こうしたメカニズムによります。

授受結合の代表例は塩ですが、しょっぱい料理も時間をおくと電子移動で塩の結合が壊れ、塩味が無くなる状況で確認できます。

このように、「もの」が壊れるのは、電子移動というたったひとつのメカニズムに過ぎません。

「もの」が壊れるとは、共有する電子を失うこと

## 7. 量子作用は瞬間作用、従って被曝は瞬間解消可能になる

「もの」の成立と崩壊は、電子移動というたったひとつの現象だけで発生しています。従って地球自然界のあらゆる現象は、電子移動の把握により、全て解明可能になります。そして、電子移動は、エネルギー移動です。このメカニズムの基、量子生態学で謳うのが、「被曝は瞬間解消可能である」、ことです。

放射能の影響は、励起と電離という二つの現象を起こします。即ち、電子移動を強制的に起こします。このうち励起は、同じ場内における電子移動のため、場としての $+$ と $-$ の電荷は変わりません。故に人体では、大きな被害には繋がりません。

一方電離は、電子を原子の集合場の外に移動させます。しかもこの作用は、人体部位を選びません。従って放射能被曝は、特定疾病のように部位を限定できず、被曝病状は定義できません。

人体以外も同様で、福島原発事故の汚染水タンクや放射性物質が関与する容器や部品類は、放射性物質の接触が常にあり、常時、電離で電子移動が強制的に起こされています。従って、通常の数倍のスピードで劣化します。

しかし電子移動とは、 $-$ 電荷エネルギーの移動に過ぎません。「もの」から電子が動いたら、元通りの量の電子を、もと通りの位置に、エネルギー移動として作用させれば、電子移動は起きなかったと同じになります。

エネルギー移動は、人間から見るとほぼ瞬間作用です。特に量子エネルギーである電子は、水場で保持しやすくなっています。従って、電子を豊富に持つ野菜や果物の水分摂取などは、人体代謝を左右し、血液・体液・細胞水などで移動した部位に、摂取した水分内の電子が即座に収まり、電子移動が無かった状態にします。これが、老化が早い人と遅い人の差を作っています。

どんな病気も同じです。

電子を失った部位に元通りの電子の量を元通りの位置に、いかに電子を補えるか次第で、早期治療は叶うと考えられます。

技術開発が進めば、病気を瞬間解消する装置などが開発できるかもしれません。

量子生態学の視点によれば、被曝は瞬間解消可能になる

## 8. 自然界は「もの」と「量子」の循環世界で、3つの形態変化で実現される

自然界は、電荷ゼロの「もの」の世界と、電荷を持つ「量子」の世界を行き来しています。

電荷ゼロの「もの」は粒の存在で、人間は目で見たり手で触ったりすることが出来ます。

しかし「もの」から部分的に電子が動くと、部分的に+や-に帯電した分子や原子が発生し、「量子」が混在します。するとそれは、目には見えますが、手で持つことが出来なくなります。

そして全てから電子が動き、全ての原子の繋がりが無くなると、全ての原子は「量子」の存在に変わり、全てが電気を持つエネルギーへと変化してしまいます。こうなると触ることはもちろん、目で見ることでもできなくなります。

水で見てみましょう。

水は、次の3つの世界を持ち、温度環境に応じて変化します。

個体の水（氷）＝電荷ゼロ分子の「もの」の世界

液体の水＝電荷ゼロ分子の「もの」と電荷を持つ分子による「量子」の混合世界

気体になった水＝全てが電氣的なエネルギーの「量子」の世界

金属類も鉱物類も同じです。

個体（金属塊）＝電荷ゼロの原子や分子による「もの」の世界

液体（マグマ状）＝電荷ゼロの原子や分子の「もの」と電荷を持つ原子や分子による「量子」の混合世界

気体（蒸発時）＝全てが電氣的なエネルギーの「量子」の世界

水が温度帯で変化するように、あらゆる原子には融点と沸点があり、同じように変化します。

水の場合の融点はおおよそ0℃以上になると「個体」から「液体」へと形態が変化します。沸点はおおよそ100℃で、これ以上になると、「液体」から「気体」へ変わります。

全てが、融点を超えると「液体」レベルになり、沸点を超えると「気体」レベルに変化し、存在を把握できなくなります。ただしいずれも、圧力条件で、融点沸点温度は変化します。

ちなみに、水素や酸素など一部の原子は、融点や沸点の温度が零下帯で、人間の生きる自然界では「量子」レベルへの変化が容易に起きません。多くがタンパク質の構成原子で、これらを3つの形態変化させるのが、今の物理科学で言うイオン化分子という、電荷を持つ分子たちです。

例えば、陽イオン界面活性剤は+の電荷を持っています。これが指先に常に影響すると、指先の原子のつながりから-電子を磁石のように引き寄せて奪い続けます。すると指先を構成する原子のつながりが一部から無くなり、ひび割れたようになります。

このように自然界では、「量子」レベルの作用で電子移動が起こされ、現象変化が起こされます。



「もの」の世界 = 「粒」の世界 = 人間が、目で見ても手で持つことができる世界

「もの」と「量子」の混合世界 = 「粒」と「エネルギー」の混合世界 = 目で見えても手で持てない世界

「量子」の世界 = 「エネルギー」だけの世界 = 人間が存在を把握できない世界

この3つの世界は、電子移動により実現される

## 9. 「量子」が「もの」に変化するとき

蒸発した水が、元の「液体」の水に戻る様子は、皆さんもよく知っています。

同じように、あらゆる原子は、「量子」として目に見えないエネルギーに変化しても、地球自然界では、どこかで再び「もの」の構成要素になり、「もの」を作ります。

植物でも、人体でも、様々な製品も、話題のAIを動かす半導体も、みな、私たちは自然の中で「量子」が集まり、「もの」として成立したり成立させたりしています。

この様子を近代物理学では、水素原子2個と酸素原子1個が出会うと水分子を構成する、と簡単に説明します。

一方、量子生態学では、原子達を陽子と電子と中性子という3つの「量子」として特定しているので、別の視点で説明する必要があります。

ですが量子生態学によれば、「もの」が壊れると反対の説明で終始します。

「量子」は数が変わると「もの」が変わりますから、「量子」が単独で存在し、そこに何らかの電磁気的な繋がりが出れば、陽子と電子の繋がりが生まれ数の変化が起き、「もの」の形成へ進みます。この繋がりは全て、「量子」の存在する場の環境条件で決定されます。

こうして「量子」の存在環境に応じて新しい「もの」が生まれるのですが、新しい「もの」の形成には、ここまで説明してこなかったある要素が関与します。それが、電子軌道です。

新しい「量子」の繋がりを作る際、「量子」としての電子が、どの電子軌道に入り繋がるか、これがとても重要になります。

電子軌道について近代物理学は、元素の種類ごとに電子軌道の様相を解明し、明らかにしてきました。量子生態学ではこの研究成果を応用し、解明されてきた電子軌道の特性を把握しながら電子の動きを探ってきました。

しかしどうしても理解できなかったのは、「量子」を「粒」という物質的な概念から離れて考えると、「量子」という「エネルギー」は、いったい何を基準に電子配置に向かって磁石的要素を起こすのか、その根拠がどこからも見えてこないのです。

地球自然界に存在する膨大な「もの」の成立に繋がる、3つの「量子」の磁石的力学を、どうしても効率的に説明できません。

例えば、－電荷の電子が 1 個存在するとき、＋の電荷が 1 個来れば磁石のように引き寄せられる現象は理解できます。

しかし、多種類の原子構成を持つ－電荷が、多種類の原子構成を持つ＋電荷と、どのような磁石的力学で電子軌道を把握して組みあわせを作るのか、うまく説明できません。

また、こうした分子物の配置を決める電子軌道そのものが、どのような仕組みで維持されて存在するかも、どうしてもわかりません。

実際に説明不可能と気付いたのは、元素周期表作成時に確認した電子配置からでした。

提唱者は 2012 年、様々な元素の持つ電子の動きを把握するために、量子生態学用元素周期表を作成しました。その際、元素原子それぞれの電子配置を掴むために、電子配位則表を作っていたのですが、途中で愕然としました。

電子軌道に順番通りに配置されない、不思議な電子配置を持つ元素の種類が幾つかあるのです。

そのため量子生態学用元素周期表では、準則元素という順番通りに動く元素の種類と、変則元素という突然変異のように番狂わせを作る電子配置の元素グループと、二つのグループを設けて表示せざるを得なくなりました。

電子配置の番狂わせは、いったい、何を意味するのだろうか？

考えた末、提唱者が得た結論は、「原子の記憶性」でした。

量子生態学では、原子は「量子」の集合です。

どんな元素原子も、量子レベルでは「陽子と電子と中性子」、このたった 3 種類しかなく、この 3 種類の動きが、様々な元素原子を作るだけです。

この電子配置の番狂わせに気付くまでは、原子は電子軌道の要素に沿い、磁石的力学で配位され、様々な原子や「もの」を作る、そう思っていました。

ところが番狂わせが存在する場合、通常ルール以外の、特別な磁石的力学の関与が必要になります。その一方で、近代物理科学による原子確認という再現性においてこの番狂わせは、いつも同じく再現可能です。

ならば、既定路線から外れる番狂わせのルールを、しっかり再現できる仕組みとは何なのか？

結論は、どう考えても「量子」たちは何かを記憶しており、自分の置かれた状況を理解したら、自分はどのように動くべきか判断可能で、この判断に沿って「量子」達は動き、「もの」として繋がりを作るということでした。

とすると「量子」は、「認識して判断し、判断に沿って動く、意志と行動力」を持つことになります。

では、この「量子の意志と行動力」は、何が作ったのでしょうか？

考えれば考えるほど、目に見えない「何か」の存在が、頭をよぎります。

こうして数年を経て得た結論は、人類は気付かなければならない、ことでした。

「人類は気付かなければならない」結論を得たのは、2024 年のことです。

この結論を得たからには、自分の生活のための経済活動とか個人的な都合とか言ってる場合じゃない、そんな思いが生まれました。

こうして量子生態学は、全理論の無償公開へ歩みを進めました。

さて、本概要書の最後に、本書を読み進めここまで辿り着いた皆様に、問います。

是非、量子生態学の視点で考えてみてください。

あなたは、何故、「自分」という存在を作れたのでしょうか？

あなたを作る「量子」たちは、いちばん最初の細胞形成時、何の記憶を手がかりに、自分の置かれた「量子」の領域を判断したのでしょうか？

そして、その判断に沿い、どのように動き、お母さんのお腹の中で、自分という存在をを作り上げたのでしょうか？

その判断の根拠を与えたのは、いったい何なのでしょう？

人類社会は、全ての人々が生きる基点にこのテーマを据えるべきと、量子生態学では考えています。

量子生態学 基礎理論要旨・野上倫加